



八小だより

武蔵村山市立第八小学校 令和3年6月1日

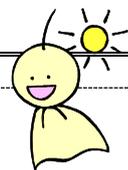
<http://www.city.musashimurayama.lg.jp/mmced8s/index.html>

教育目標

- ◎ 考える子
- 思いやりのある子
- やりとげず子
- 礼を重んずる子

行動目標

わけをそえて話すことができる子
教室で話しているのは一人



クローバーが教えてくれる「命と向き合う」ということ

副校長 植杉 義久

4月9日（金）に本校で飼っていたうさぎのクローバーが亡くなりました。クローバーは地域の方から譲り受け、8年間子供たちの成長を見守ると同時に、子供たちの情操教育に尽力してくれました。

昨年度までは、飼育委員会の児童が中心となりクローバーのお世話をしていました。季節や天候に関係なく、中休み、昼休みに食事や水の準備、片付け、小屋の掃除など曜日ごとに担当を作り、毎日欠かさず仕事をしていました。その誠実な仕事ぶりに感心しました。うさぎは、暑さや寒さに強くありません。そのため、クローバーには、過ごしやすい春秋は広い小屋で、夏や冬は狭いゲージに引っ越してもらい職員室で過ごしていました。その引っ越し作業は飼育委員会の仕事でした。また、飼育委員会では、「命の大切さ」を全校児童に知ってもらおうと、「ふれあいタイム」としてクローバーと直接触れ合える時間を設定したり、飼育委員の仕事を経験するイベントを企画したりもしました。動物のお世話をする中で「命と向き合う」委員会でした。

休み時間になると低学年を中心に小屋の前に数人が集まり、クローバーの様子を眺めている姿が見られました。

このように、お世話をするクローバーがいる、小屋に行けばクローバーに会える、そんな学校生活が当たり前になっていました。今年度もそんな日常が続くことを多くの人が想像していました。クローバーが亡くなった翌週の4月12日（月）には、今年度最初の委員会が予定されていました。

現代において日本全国すべての小中学校で「生命尊重」「思いやり」といった教育は、道徳の時間（本校では徳育）を中心に学校生活あらゆる場面で行われています。東京都教育委員会は、6月、11月、2月を「ふれあい月間」とし、子供たちがより良い人間関係構築を進める強化月間に指定しています。それでも、令和2年度における東京都の非行少年の検挙、補導人数は4000人を越えています。全国で自ら命を絶つ小中高生は400人以上います。子供たち一人一人にそれぞれの事情や背景があるにせよ憂慮すべき数字だと感じます。コロナ禍において、これまで以上に「生命尊重」「思いやり」の教育の重要度は増しています。

では、どのようにすればこの数字を減少させることができるのでしょうか。

短期間で減少させることは難しいですが、学校生活を通して子供たちが「命と向き合う」場を作ることが必要なのではないかと考えています。命と向き合うとは、「命」あるものと関わること、その「死」とも関わることです。



現在のうさぎ小屋。花とクローバーの写真が飾られています。

飼育委員会では、クローバーが亡くなってから、児童から新しいうさぎを飼う話も出たようです。しかし、いなくなったからすぐ次を用意するのでは、ゲームと同じ感覚になってしまいます。命は1つしかないのです。生前のクローバーに思いをはせ、クローバーの死を受け入れ、どのようにお別れをするか、委員会ができること、全校児童ができることを考えています。もう少し時間がかかるかもしれませんが。この考える時間も「命と向き合う」ことなのではないかと思えます。動物以外の生き物や植物の命とも向き合うことはできます。ですから、委員会だけでなくどの学級でも「命と向き合う」学習はできます。これからも、生物を慈しみ育てるだけでなく、その先まで寄り添える児童の育成に尽力して参ります。